
名無き世界と未知の世界（仮）1-2

元号四年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名無き世界と未知の世界（仮） 1 - 2

【Nコード】

N0141T

【作者名】

元号四年

【あらすじ】

俺が葉盟学院に編入してから二週間が経った。季節は若者なら誰しも興奮する夏。俺とあの子の距離も急接近！？ 新キャラも登場ですますヒートアップしていく俺の波乱万丈な高校生活。タイトルがまだ決まらないんだけど、誰かいい案があったら教えてください。

夏の到来

七月。一月後の夏休みに向けて若者が心を馳せる季節。そんな季節の到来に、俺の心も「イイヤツホオオオ！」状態だ。

俺の名前は星野龍馬^{りゅうま}。もう知ってる人も多いかもしれないけど、

一応自己紹介。まさか二巻に行くとは思ってなかったし。

外見は超高身のイケメン。短く切りそろえた髪はいつもと同じように無造作に立たせている。

三日ほど前まで残っていた梅雨前線も、諦めの早い監督のように足早に去っていき、空では爛々と輝く太陽がタンクトップから出た俺の両腕を容赦なく焦がす。今年の夏は真っ黒になりそうな予感がまあそれはともかく、今日俺は葉盟学院^{ようめいがくいん}の内部にある、シヨツピングエリアへと来ていた。隣には俺を誘った愛華^{あいか}の姿もある。

愛華の格好は、薄い水色のキャミソールの上にまたも水色の半袖上着を着て、薄い青のデニムスカートを穿いている。足元は水色のサンダル（ミニールだっけ？）を履いて、全体的に青系統の色で固められているため涼しい印象を受ける。

着ている物のイメージとかは昔からあまり変わっていないものの、結構気合が入ってるっぽい。アクセサリの類は俺と同じであまり付けない派らしいけど、代わりに普段ポニーテールの髪を下ろし、近頃流行のゆるふわ系で攻めてる。まあ、可愛いと思う。

葉盟学院は基本的に外への外出が出来ないため、学院の敷地内に巨大なシヨツピングエリア、遊園地やプール、動物園などがあるアミューズメントエリア、美術館やコンサートホール、図書館などがあるカルチャーエリアの三種類がある。

エリアの一つ一つには私鉄のリニアが走っていて、学院をぐるっと一周取り囲むようにラインがある。それぞれの学部（幼少部、初等部、中等部、高等部、大学、大学院）の前にもちゃんと駅があって、その中だったら生徒は自由に行動が出来る。

平日は原則、制服の着用が義務付けられているが、休日は私服だろうとなんだらうと許されるからこのショッピングエリアにも私服の生徒は八割以上いる。

で、俺と愛華がいるのはこのショッピングエリアの中でも最大級の規模と店舗数、庶民御用達のしまむら（静岡限定か？）と、高級品ばかりを取り扱う店までなんでもある超巨大ショッピングセンター、『Zeckert』だ。読み方がいまいちよく分からないけど、多分『ゼクト』と読むのだろう。そう読むことにする。

服のほかにも食料品やホビー、本屋にレンタルビデオ店、AV機器の販売店に、家電量販店などもあって、生徒から教師までさまざまな人がここを利用している。

「ところでさ、何を買った？」

「えっとね、去年買った水着がもう入らなくなっちゃったから新しいの買おうと思って」

なるほど。成長期だろうし、胸とかも大きくなるだろうからな。「俺も新しいの買うか。手持ちの水着なんて学校指定のやつしかないし」

ちなみに、葉盟学院の指定水着は男子は競泳、女子は旧型のスクール水着だ。一部の人間にとっては伝説の武器並にレアだと好評だが、俺はあまり好きじゃない。体のラインが強調されるからとかじゃなく、単純にビキニとかのほうが好きだからだ。

「じゃあ水着売り場に行くか。えっと……」

「水着売り場は三階だよ。ほら、行こ」

そう言っただけで愛華が俺の手を引っ張る。

「はいはい。分かったからそんなに引っ張るなって」

何でもいいけど、愛華の笑顔が見られて良かったと思う。

そんなこんなで水着売り場。俺はその凄まじいほどの数に圧倒されていた。

右を見ても左を見ても水着だらけ。特に女性用水着の比率が半端じゃない。八対二ぐらいだろうか。

「最近のはいろんなのがあるんだな……」

適当に水着を取ってみると、南国風の絵がプリントされたものに黒い龍が描かれたもの、真っ白な地に筆文字で「仁義」と書かれたものまで様々だ。

「あ、これいいんじゃない？」

「どれどれ？」

愛華が引つ張り出したものを見て、なるほどと思った。

明るい茶色の生地に将棋の駒がプリントされ、正面に「王将」、左右に「龍」と「馬」が書かれている。バックには「金将」と「銀将」も描かれ、それ以外には所狭しに「歩兵」と「と金」が散りばめられている。

「これいいな。サイズいくつ？」

「えっと、4Lだって」

「ピッタリじゃん。よし、決めた」

俺はそれをハンガーから取り外し、料金のタグが見えるようにする。2980円。値段もお手ごろだ。

「じゃあ次は愛華の探すか」

「うん」

今度は女性の水着売り場に足を踏み入れる。だが、途端に場違い感がしてきた。

今日は土曜日で、しかも午前中の昼前と言う時間もあって結構客は多い。見渡す限り女性ばかりで（当たり前か）、男の姿は見当たらない。

「愛華」

「何？」

「俺さ、外で待っててもいいか？」

「ダメ。私の水着探すの手伝ってくれるって言ったでしょ？」

「言ったけどさ……」

俺って身長がかなり高いからだだでさえ人の視線集めるって言うのに、こんなところで女性用水着を物色してるところ見られたら、

下手したら変態扱いされるぞ。

仕方ない。さっさと終わらせてここを脱出しよう。それが一番の方法だ。

「愛華はどういうのがいいんだ？ 可愛い系か、セクシー系か、スポーティ系、とりあえずジャンルを特定してくれ」

「え？ うーん……そうだなあ……」

まあ、俺的に似合うと思うものが目の前にあるんだけど、ジャンルのには可愛い系だし。愛華がセクシー系がいいと言ったら他のものを考えないといけないし。

「……ぱり……と……われ……し……」

「ん？」

「ねえ、龍馬はどういうのが良いと思う？」

「俺？ やっぱりこーいうのが……」

そう言っただけで目の前の水着を取り出す。水色の生地白いラインが一本だけ入った、いわゆる紐ビキニとかいうやつだった気がする。愛華のイメージカラーともピッタリ一致するし、愛華の色の好みとも一致するだろうと思って選んでみたんだけど。

「わあ、これすっごく可愛い！」

「そうか？ ならいいんだ」

どうやら気に入ってもらえたらしい。

「ね、試着してもいいのかな？」

「いいんじゃないか？」

そう言っただけで、愛華は足早に試着室の中に飛び込んでいった。

「やれやれだな……」

今更衣擦れの音でドキドキするような純情な心は持ち合わせていない。青春真っ盛りの高校二年生にとってはあるまじき状態なのかもしれないけど、ある意味悟っちゃってるからそこらの童貞どもと同じような感覚など既がない。

そんなことを考えていると、早くも着替え終わった愛華が試着室から出てきた。

「ど、どうかな？」

「いいんじゃないか？ 俺はそういうの好きだけど」

事実、愛華の水着姿は可愛かった。

水色の水着は愛華の雰囲気にもピッタリ一致するし、そこそこ胸もあってスタイルもいいから、そこいらのグラビアよりも全然可愛く見える。あとは何かアクセントがあっても良い気がするんだけど

「ちょっと待ってて」

「え？ 龍馬？」

俺は愛華をその場に残し、水着売り場の入り口の辺りに戻る。

「すみません、ちょっとこれ借ります」

「え？ あ、はい」

店員さんに一応断ってから展示品の近くに飾られていたアクセントのハイビスカスを一輪取る。それを持って試着室のところに戻る
と、愛華が「一体何がしたいの？」と言わんばかりの顔で俺を見ていた。

「愛華、目え瞑って」

「え？ う、うん」

愛華は俺の言ったとおりに目を瞑り、どういつわけか顔を上に向けた。

多分キスされると思うてるのかもしれないけど、俺はこんな公衆の面前で破廉恥な行為をするような腐った脳みそは持ち合わせていない。

俺は手に持ったハイビスカスを愛華の頭に髪飾りのように付け、二歩下がってからそのフィット感に驚いた。

「いいぞ」

「え？」

多分キスされるんだろうと思っていた愛華が頓狂な声を上げて目を開く。

「可愛いじゃん。よく似合ってるぞ」

「あ……これ……」

愛華が試着室の中にある鏡を見て、自分の髪に付けられているハイビスカスを認識する。それを触ったり、右のアングルで見たり左のアングルで見たりしながら可愛らしくはにかんだ。

その笑顔は真夏の太陽にも負けないくらい眩しかった。

「それでいいか？」

「うん。ありがと」

水着から普段着に着替え終わった私を、龍馬は試着室の外で嫌な顔一つせず待っていてくれていた。龍馬が可愛いつて言ってくれたのが嬉しくて顔のニヤニヤがなかなか止まらず、実際十分ぐらい待たせちゃったけど、それでも龍馬は優しい。

龍馬が選んでくれた水着は、少し高めのもの3980円だったけど、この位の出費なら痛くも痒くもない。そんなことよりも、龍馬が私に似合うと思っただけで選んでくれたという喜びのほうが大きい。

レジの店員さんに私の水着を出すと、それと一緒に龍馬も自分の水着を出した。その手には財布が握られていて、もしかしたら払ってくれるつもりなのかもしれない。

でも、流石にそれは悪いから自分の分は自分で

「お会計は？」

「カードで」

払おうとすると、龍馬が高校生らしからぬことを言った。え？

「かしこまりました。少々お待ちください」

もしかしてクーポンみたいなものなのかなとも思っただけど、龍馬が店員さんに差し出したのは真正銘のクレジットカードだった。

しかも、世界共通のVISAだ。

「お待たせしました。こちらが商品になります」

「どうも」

突然の展開過ぎて頭が付いていかない。クレジットカードって、普通の高校生が持つようなものじゃないはず。それに、龍馬の両親は普通のサラリーマンに専業主婦だったはず。どう考えてもこんな短期間にのし上がれるほどの甲斐性があったとも思えないし

「か。愛華？」

「えっ？」

いけない。意識がどこか別のところに飛んでたみたい。は、恥ずかしい。

「どうした？ 急にボーっとして」

「あ、ご、ごめん。あ、あはは……」

「????？」

龍馬は私を見て不思議そうな顔をしている。穴があったら入りたいてこつういうことを言うのかな？

「そろそろ時間だな。昼飯にするか」

「あ、うん」

腕時計で時間を確認すると、丁度お昼の十二時。それを確認すると同時に、龍馬のお腹がぐっぐっという音を立てた。

「悪い。そう言えば朝飯食ってなかったんだ」

「じゃあ沢山食べられるところ行こつか。良いところ知ってるんだ」
実は、私のルームメイトの灯が結構な大食漢だから、灯と一緒に出かけると自然とそっち系のお店に行くことになる。龍馬と同じ幼馴染で仁っていうのもいるけど、そっちも灯以上の大食漢だから一緒に出かけると自然とそういう店に連れて行かれる。龍馬が葉盟学院に編入してくる前に仁と灯が同じ店で出くわした時、その店を貸しきってフードバトルを始めたぐらいだから、それを聞いたときは正直呆れた。

結果は、仁の圧勝だったらしいけど。

「何が食べたい？」

「そつだな……カレーとかかな……？」

「それならここからちよつと歩いたところに『The curry』

っていうカレー専門店があるからそこに行こっか」

この学院の敷地内にある飲食店には、基本全ての店に大盛りメニューがある。学生が大半を占めるこの学院で、大食いの人の数は限りないからだ。この学院の、一年間の一大イベントである葉盟祭では初日に学院全体参加型のフードバトルが行われ、優勝者には学食のデザート一年間タダという豪華景品まで出された。

まあ、その権利はその時優勝した仁から頬にキス一つで買収したんだけど。

「じゃあ急ご？ あのお店、一時になると急に混み始めるから」

「お、おう」

龍馬の左腕に自分の右腕を強引に絡ませて龍馬を引っ張る。体格差もあって全然動かないけど、龍馬は「やれやれ」と言わんばかりの表情で素直に歩き出した。

灯曰く、

『強引に腕を絡めて振り解かれないなら脈アリ』

らしいので、私は灯が言っていた「相手の動作や挙動で分かるその人に対する気持ち」の第二弾の決行を決めた。

第二弾は、腕を組んだまま指までがっちり固める「恋人繋ぎ」というものやって、何か言われたらその人は自分のことが好きじゃない。何も言わずにその人も力を込めるような素振りを見せれば、自分に恋心を抱いてる（可能性アリ）と判定する。

一度深く深呼吸して気持ちを落ち着かせる。すう、はあ。よし。

右手をすつと下に降ろし、自分の指と龍馬の指を絡める。で、一応確認。

「……………」
多少恥ずかしそうな顔はしているものの、嫌そうではない。本当に嫌だったら指を絡めようとした時点で拳を握るだろうし。

実は、龍馬には少し嘘をついた。今から行こうとしている『The e c u r r y』はさっきまでいたショッピングセンターから少し

離れてる程度じゃない。歩いたら三十分はかかるぐらいに離れている。場所的にはショッピングエリアの東ブロック、その一番端にある。本当はこの近くにもカレー屋さんはあるけど、そこだと歩いて二分ぐらいだからそれだと面白くない。出来るだけ長くくっついていたいのが為のウソだ。

そしてこの行為には三つの思惑があった。昔の面影は残っているものの、龍馬は昔とは比べ物にならないくらいにイケメンと化している。しかも、身長は日本人離れしてるほどの長身だし、自分をアクセサリで飾ったりもしてないから素朴な格好よさが滲み出ている。そのため、龍馬に一目惚れをした女子は高等部の二年の中で二百人以上いる。そういう人達を出し抜くため、という考えの下で決行したものだ。

二つ目は、私のこの学院での立場。性格は昔から変わってないと思うけど、基本的に世話好きだし「人に優しく」がモットーだから、学院内での信頼も厚い。ただ、以前灯と話したとおり、私は小学校の頃から龍馬のことが好きだったため、自分に告白してくる男子を片っ端から追い払って（言い方がちょっとアレだけど）いた。そのせいでか、学院の人たちは私が「女子のことを好き」だと勘違いし始めていた。そういう悪いイメージを払拭して、私もちゃんと男子に興味があるんだというアピールをするため。

そして三つ目が、単なる自己満足。鈍感な龍馬のことだから私の気持ちにはまったく気付いていないんだろうけど、私は今すぐにも龍馬の恋人になりたいと思ってる。けど、何の脈絡もなしにそんな事を言ってもムードが無いから、きちんとしたシチュエーションの下で告白はしようと思ってる。

それと、さつき水着売り場の店員さんは私のちょっとした知り合いだっただけけど、その人が「何？ 彼氏？」と聞いてきたのがかなり嬉しかった。自分で言うのもなんだけど、私は自分のことが可愛いって自覚してるし、傍から見た時、私と龍馬はかなりお似合いのカップルだと周囲に認識される。龍馬は見た目だけならただの格

好い高校生だけど、その中身を知ると私と付き合っても不思議じゃないと思われるらしい。

二週間前の、高等部二年の学年ランキング戦。その時、突然出現した多眼のモンスターによって第一アリーナは壊滅寸前まで追い詰められた。

けど、その危機を救ったのが他でもない龍馬で、学院の人は殆ど全員がその力を認めている。一部の生徒には不満を持つ人もいるみたいだけど、この二週間の間に龍馬の魔法技能は学院の中でも上位に入るほどの実力になっているため、わざわざ勝負を挑もうとする人はいない。はっきり言って自殺行為だからだ。

まあそれはさておき。

今日の私の服装は龍馬が編入してくる少し前に買ったものだけど、学生が買える物だからそんなに値段は高くない。服屋に入ってたんとなく気に入ったものを買ってたら、なぜか青色系統のものばかりが溜まっていた。その時は衝動買いしたと思っていたけど、龍馬が褒めてくれたから結果オーライってことにした。

で、龍馬の格好は結構ラフだ。赤い龍がプリントされたジーンズを穿いて、上着は黒のタンクトップだ。ただ、一つだけ明らかに昔と違うものがある。

右肩のあたりから肘にかけて、トライバル模様の刺青が入っている。シールかと思っちょつと確認してみたけど、どうやら本物っぽい。

それに、首にかかったチエーンの先に少し安っぽい造りのアクセサリが目に入る。さっきは普通にカードで買い物をしたから、あんな安物じゃなくてちゃんとしたシルバーアクセとかも買えるはずなのに。

「どうした？ さっきからじつと見て」

「ふえっ！？ な、なんでもないよ！ あ、あはは……」

じつと見ていたことを突然指摘されたせいで思わず変な声が出てしまった。みっともないことこのうえない。

「え、えつとね……そのアクセサリのことなんだけど……」

「ああ、これ？」

そう言っただけで龍馬が右手でアクセサリを見せるようにする。うーん、やっぱりどう見ても安物っぽいなよね……。

「愛華が俺の誕生日にプレゼントしてくれたんじゃない。忘れたのか？」

「え？」

「小二の時の話。お前、泰葉さんに二千円の小遣いを懇願したって言っただけじゃん」

そう言えばそんな気も……あ。

そうだ。あれは私が小学生の……たしか一年生の終わりの頃、何かのテレビか雑誌で読んだ（その頃から何故か漢字だけは得意だった）「大切な人へのプレゼントはシルバーの首飾りで決まり！」という特集を見て、「これだ！」と思って龍馬の誕生日 五月十七日 直前に、私の母である姫城泰葉ひめじょうたけはに必死に頼み込んだのだ。（そんな昔のこと、今でも覚えててくれたんだ……）

さすがに学校にまで付けていくわけにはいかなかったが、二人で会うときには必ずその首飾りを付けて来てくれていた。

そんなことも追想のように思い出してしまっぐらいに嬉しい。自分の顔が急激に熱を上げていくのが分かる。

「愛華？」

「はっ、はっっ！」

ああもう恥ずかしさの連鎖反応だよ。ウラン235が核分裂を起こす時並の連鎖率だよ。誰か、私の心の中に制御棒を入れてください。それが神様、私に全てを包み隠さずに言える純粋な心を下さい。「しっかし今日も暑いな。秋田はもう少し涼しかったからなあ」

「あ、うん。そうだね」

龍馬にそう言われて思い出す。私が静岡に引っ越してくる前に住んでいた町、秋田県の大仙は、気候的にはかなり涼しい方だ。夏はもちろん暑かったけど、それでも静岡ほどじゃない。

それはそうと、私も仁も秋田から出てきて六年ぐらい経ってるから、既に向こうの方言は殆ど覚えていない。逆に静岡訛りになってるぐらいで、「くじゃん」とか「くもん」とかそう言った言葉がよく出てくる。一番気になるのは龍馬も静岡訛りになってることだけど、龍馬のお母さんは確か静岡出身の人だったと思うからそこまですべてでもないのかもしれない。龍馬のお父さんは純粹な秋田県民だったけど。

「そう言えば、龍馬も秋田を出てるんだよね？」

「そうじゃなかったら俺は今ここにはいないな」

「あ、そうだね」

それもそうだ。それに神流は東京にあるはずだし、家も あれ？

「龍馬、おじさんとおばさんはどうしたの？」

唯ちゃんが神流にいるっていうのは聞いたけど、おじさんとおばさんはどうしたんだろう。あのまま秋田に住んでるのかな？

「ああ、あの人たちね」

「え？」

「縁を切った」

え？ どういうこと？ 縁を切ったって……なに？

「愛華たちが秋田を出てって、小学校を卒業して、地元の中学に入ってから少し経った日のことだった。パソコンで調べ物してる最中、偶然数式の難問が目に残ったんだ」

歩みは止めずに淡々とした声で話し続ける。感情がこもってないのが逆に怖い。

「解くのに時間はかからなかった。ほんの二週間。で、計算式をまとめてアメリカのサーバーに送信したら、その式が認められてリーマン予想は解明。俺の手元には莫大な金が転がり込んできた。それも、一生遊んで暮らせるレベルの、な」

「それじゃ……」

「ああ。あの人たちは俺の能力に目を付けた。未だ解かれていない数式を俺に解かせ、転がり込んでくる金を湧き水のように使い続け

た。……俺は何も知らずに、利用されてただけだったんだ。金を生み出す機械みたいに」

龍馬が手に力を込めたせいで、つないだ右手が少し痛くなったけど、龍馬は多分それ以上の悲しみと苦しみを味わってきたんだ。

「利用されてたのに気付いたのは中二になってから。その頃には、あの人たちは仕事なんかとづくに辞めてた。俺の稼いだ金でタヒチに別荘買って、クルーザー買って、一年の半分以上を国外で過ごすようになってた。教育義務を放棄してまで」

「それじゃあ、龍馬は……？」

「あの人たちには海外赴任だって言われてた。よくよく考えたら、会社でもそんなに上のほうにいないあの人が海外に赴任だなんて、おかしいとは思った。けど、唯のことも見てやらないといけなかったし、家を出る時は大体スーツだったから特に指摘もしなかった」

空気がどんどん冷たくなっていく。気温はがんがんに上がって日差しは物凄く暑くて、街の喧騒はかなりのものなのに、背筋にはただの汗じゃなくて冷たいものが流れる、そんな張り詰めた様子を感じさせる声だ。

「でもま、今はそんなことどうでもいいだろ。そんなことよりも腹減っちまったよ。もうカレーじゃなくてもいいからさ、その蕎麦屋入って蕎麦食おうぜ」

龍馬が指差した先には、昼時でも必ずテーブル席が一つか二つ空いているそこそこ人気のある蕎麦屋さんが建っていた。熟練された技で練られる蕎麦が絶品だと、前に大和君が熱く語っていたような気がする。

「ほら、さっさと行くぞ」

「え？ ちよ、ちよっと待ってよ」

有無を言わせぬ様子でずると引きずられ、私は蕎麦屋へと引きずり込まれた。

もっと詳しく聞きたかったけど、龍馬が自分から話してくれるのを待つしかないか。

それから、寮の部屋に戻るまでの間、私は龍馬との恋人気分を満喫していた。

この小説を読んでくださっている方々へのお詫び

いろいろと書きだした二巻ですが、話があそこから展開できなくなってしまうので最初から書き直すことにします。時期としては七月の頭から夏休みに入るまでを描くつもりなので、当然のように季節感ゼロです。

続きを読むのを楽しみにしてくださっている方々（そんな人がいるかどうか分かりませんが）、僕の勝手にいったん打ち切ることをお許しください。次回投稿するときは今よりもっと良いものになっているはずです。

すでに投稿されているものは番外編のようなものだと思ってください。これからもちよくちよく番外編は書いていきますが、本編とは全く関係ないことが多いです。

これは僕が一人で考えた空想の産物なので、至らないことは多いと思います。しかも、読む人のことも一応考えてはいますが、結構自己中心的な書き方になっていることも多いです。

二巻の一章の投稿は、できる限り五月中にはやりたいと思いますので、こうしたらいいんじゃないか、とか、こういう展開がほしいとかの感想、批評は受け付けます。多少厳しいことを書いてくださっても全然オーケーです。そのほうがいいものが作れるかもしれないので。

なお、予定では女の子の新キャラが三人ほど出てくる予定です。初期設定の時点でメインキャラに女の子が少なすぎるため、とある友人の意見でもっと女の子がいたほうがいいということになり、そういうことになりました。

では、この巻はここでいったん終了します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0141t/>

名無き世界と未知の世界（仮）1-2

2011年5月17日15時25分発行